

# QUANTUM ECOLOGY

## 量子生態学

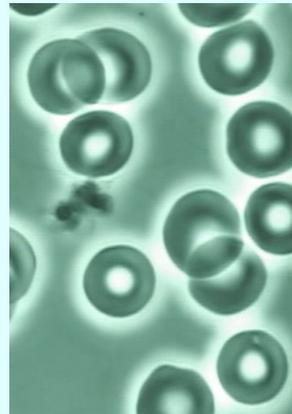


量子生態学理論サイト

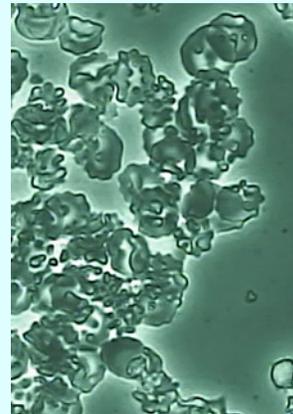
量子生態学提唱者が研究過程で見つけたのは、自然界には「人間が悲しむことを許さないシステムが存在する」という事実でした。分子運動観察から、赤血球内ヘモグロビンは肉体や内臓に物理的異常を受けると、挙動異常を起こすことがわかっていました。間もなく同じような異常を、精神的な悪影響でも発生することに気付きました。つまり人は、ストレス・恐怖心・悲しみなど負の感情を受けることでも、血液環境が病気同様の状況に陥ってしまうのです。これはストレス社会は病気を作り人間が健康に生きられず、社会そのものが成立しなくなる、そんな自然摂理の存在を示唆しています。

実はこの現象に関連する血中分子挙動に関する研究論文は過去、世界中に登場していたのですが、日本でも海外でも生物学や医学の定義に沿わないと潰され続けていました。それ故に医学研究は進みが叶わず、今だに病気を撲滅できずにいます。

量子生態学は、近代科学界の関与が無かったために研究を妨げる人が無く、自然界の分子運動を自由に観察し続け人体も鉱物も共通機構を持つことがわかり、鉱物も生きていることを説明する理論を整備できました。



正常赤血球



異常赤血球

正常なヘモグロビンは、赤血球内で均等分散した回転運動で正円形の赤血球を作ります。しかし体内異常や精神的ストレスがあるとヘモグロビンは集合や連鎖を作るため、赤血球がいびつになったり金平糖状などの異常な形状を作ります。

## ”Nature’s Law” ”自然摂理” 自然界は、人間が悲しむことを許さない

量子生態学は、電子移動というたったひとつのメカニズムだけで、宇宙自然界におこる現象の全てを説明します。従って量子生態学には、地球が火の玉だったときから、植物が登場し、やがて人体を誕生させた進化を、電子移動だけで説明する地球生成理論があります。

電子移動だけで地球形成を振り返ると、地球の全て、即ち、鉱物も人体もあらゆるどんな存在も、同じ地球進化システムの上であり、人間が生きているなら鉱物も生きていると説明せざるを得なくなります。それ故に量子生態学には、鉱物代謝という鉱物の生命現象論があります。

これに対し、現在の物理科学はどうなっているのでしょうか？

18～19世紀前後の生物学発展最初の頃、近代科学界は鉱物は無機物・生命は有機物とし、無機物は生きものでは無いと決定しました。20世紀初頭には原子の存在が確認され、全ては粒であると定義されました。以後も数々の現象について決定事項が作られ、この下に物理科学界は細分化を続け、現在は把握できないほどの数の学会が成立しています。各学会は上がってくる膨大な理論を、100年以上前に作られた定義を基礎に裁定を続け、しかも認められる理論はごく僅かです。そしてこの一部の理論下で政治経済は、技術や商品の評価や認可を行い、沿わないと世の中に登場させない行為を繰り返してきました。

このような状況下で、人類社会は存続できるのでしょうか？

私たちは呼吸で大気を体内に入れ、自然環境の恵みによる作物を食べ、自然界を循環する水で生命を維持しています。量子生態学の視点ではこの全てが連動しており、地球は人々の感情や思考さえも縫合しながら、ひとつの代謝機構で進化しているとしか考えられません。しかし近代物理科学界に、このような考え方を見ることはできません。

このままでは、新たなウィルスや難病は発生し続け、異常気象は破壊力を増し、経済システムは人々に不満を増産し続けるでしょう。この現状を打開するには、社会が量子生態学を認め研究を進め、政治も経済も、あらゆるものごとに、自然界システムを反映する体制を整える必要があります。